

京都出身の踊り手。本日の舞台上の主役・黒田紘登さん。「キザなことをハナにつかせずにやってしまうエレガントさやお洒落さを見せたい。あらゆるダンスを経てフラメンコの世界へ。スペインへの留学を重ね、ヒターノ・カルチャーを発信する



Watching Carefully

取材・文／竹中 晴(本誌) 撮影／齊藤 弦

soniquete

concient de musica latina

La fiesta de anniversario de RIN 4 años

@Lab.Tribe

「情熱」「太陽」「ラテン気質」…。スペインという国を簡単な言葉で語るのは、もうよそ。フランコ将軍の弾圧、バスク人とカタルーニャ人…、笑顔だけでは語れぬ歴史もあれば、巡礼の道「エミリオ・デ・カンポステイラ」を行く人々の真摯な顔もある。そして、アンダルシア地方のセビージャに辿り着いた流浪の民、ヒターノたちの魂が生んだ踊り、フラメンコ。神に捧げるものでも、金のためでもなく、切ないほどの「人」の踊り。力を込めて伸べる手の先に、地に踵を強く打ちつけた下に何があるのか。抑えきれない感情を何故にそこまで体の内に留めおこうとするのか。観る者が憤りに近いほどの感動を得る。時に涙を伴って溢れ出るそれは、もはや歎哭に近い。この夜、baile(踊り手)である黒田紘登さんは言った。「フラメンコは芸術でもあります、それ以前に、人生そのものなんですよ」。

楽しい時間は早く過ぎるというが、今宵のステージには「60分」という数字を越えた時間があった。「すげえ」と思わず呟いてしまった観客の言葉は、「ヤバイよこれ…」になり、ついには言葉を失う。

嬌声、ストロボ、調子外れな拍手…、無粋を働いた者も気付いただろう。cante(歌い手)の第一声に胸撃ち抜かれ、guitarra(弾き手)の旋律に全身総毛立ち、baileの手拍子を、床を打つ踵の音を、ほとばしる汗を、衣裳のはためく音を心で感じた者にこそ、素晴らしい夜は訪れるのだと。

オーガナイザーである「りん」の日高大樹さんは言う。「アバレルのバイヤーとしては、世界中を回って、その国々の新鮮で熱いエッセンスを取り入れたセレクトで、その空気感ごと発信してゆきたいと考えています。そんな僕が同友、黒田君を通してフラメンコを知ったとき、今まで知らなかった音楽的要素や踊りに感銘を受けた。これを何かの形で発信したいと思ったんですね」。

スペインの国旗に染められる赤は血の象徴であるという。脈々と受け継ぐフラメンコの世界でも、赤はきっと血の色だ。人はストイックに、身を削って生きていく。それは服を売っても、酒を売っても、そして踊っても変わらない。切なる踊りが、誰しもに人生が切なくもドラマティックであることを改めて刻んだ、そんな一夜だった。

踊全アンダルシアから人生を込めて。全ての感覚と、まだ見ぬ内なる感覚と。つた色は赤。それは、長い夜。

今宵の仕掛け人、寺町三条「りん」の日高大樹さん。「地元の小さなワインテージショップのパーティに、ジャンルや地域性を超えたアーティストが集まってくれました。こうして一つの世界を作り上げたことで、人と環境が結びついた気がします」



腹に響く歌声は、カンツォーネや日本民謡だけではないことを教えてくれたcanteの藤井祥子さん。踊り手から転身したという経験を持つ

踊り手紅一点、覓章子さん。凛々しさを通り越し、鬼気迫る表情で踊った様子は随一だったかもしれない。時折見せる笑顔がまた素敵であった

→まずフロアを暖めたのは、黒田さんと既知であるDJ c.k aka force。フジロックフェスなどでも活躍、UKレイヴシーンの洗礼を受け、日本にドラムンベースを持ち込んだ一人でもある



←クラブイベント突入時にブースを預かったDJ sinkichi。日高さんが三顧の礼で招いたのだが、実は彼が強くりスペクトするのがDJ c.k aka forceだったという、これまた開けてビックリな相関図

guitarraのハイメ吉川さん。時に叩くように、時に撫でるように自在にガットギターを操る六弦職人。皆、黒田さんが「僕が尊敬してやまないファミリア（家族）です」というアーティストだ



理恵さんは黒田さんのスポーツマンであり、さまざまな踊りの見習者。「フラメンコは踊り手と奏者による音遊びの要素が面白いんです。でも、そこまでなるには相当練習しなきゃ（笑）」

大阪のフレンチ「オリビエ ル フランソワ」のオリビエさん。「ホクはウルサイ人間やネン。でも彼らは最高。世界中の人に観て欲しい」。出番終りの黒田さん・福田さんと



11歳からフラメンコを始め17歳でプロデビュー。現在の黒田さんの師、福田進さん。力強く歯切れの良い体さばきと、ソロを踊り始める前から滴る汗が印象的だった